

(トップページ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(中東 VIP 劇場シリーズ: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/VIPtheatre.html>)

(バハレーン: <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/Bahrain.html>)

マイライブラリー:0237

(注)本稿は 2012 年 8 月 20 日から 9 月 4 日まで 3 回にわたり「アラビア半島定点観測」に掲載したレポートをまとめたものです。

2012.9.4

前田 高行

中東 VIP 劇場バハレーン篇:対話か対決か?サルマン皇太子はハムレット

目次	頁
1. バハレーンの「アラブの春」	1
2. サルマン皇太子の横顔	2
3. 老獪な首相と隣国サウジアラビアの危惧	4

1. バハレーンの「アラブの春」



2010年12月にチュニジアで発生した民主化運動、いわゆる「アラブの春」はリビア、エジプト、イエメンなどの共和制独裁国家を次々と飲み込んでいった。これらの国は貧富の差が激しく職の無い多くの若者が社会の不平等に怒りを露わにした。IT 世代の若者は権力に対抗する唯一の手段としてインターネットのフェースブックやツイッターで政府に対する抗議活動と呼び掛け公共広場でデモを繰り広げたのである。

湾岸の君主制国家も例外ではなく、中でも最も大きな影響を受けたのがバハレーンであった。イスラム教の宗派對立と言う根深い問題を孕んでいたことが紛争を複雑かつ過激なものにした。バハレーン国民の7割はシーア派であるにもかかわらず、ハリーフア王家をトップとする3割のスニ派が同国を支配しており、多数派のシーア派国民は政治的にも経済的にも冷遇されていた。そのため同国では1971年の独立後もシーア派住民による反政府暴動が絶えなかった。今回の騒動は外国で始まった民主化運動がきっかけであったが、バハレーン固有の宗教問題がルーツにあったことが特色である。彼らシーア派住民は就業機会の平等を求め、また正当な政治参加の権利を求めて反政府デモを繰り広げたのである。

但し彼らは王制打倒と言うような過激な変革を目指していた訳ではなかった。国民の多くは湾岸で最も古い歴史を持ち、また近代では金融立国としての安定した反映を誇る自国に愛着を持っていた。また彼らはハマド国王の進歩的な政策を支持し、欧米教育を受けた彼の息子サルマン皇太子に対しても期待と親愛の念を抱いていた。欧米では彼らが同じシーア派のイランと結託して王制に揺さぶりを掛けているという見方があるがそれは正しくない。大国意識の強いイランはバハレーンを属国視する意識があり、そのような趣旨の発言をあからさまに唱える政治家もいる。このようなイランの態度に対してバハレーンのシーア派住民自身はむしろ警戒心を抱いているのが実情である。

そのような訳でバハレーンの「真珠広場」で反政府デモが発生した時、若者を中心とするデモ参加者の要求は経済・社会参加における不平等の是正を求める穏健なものであり、政権打倒を目指したものではなかった。彼らは支配者即ちハリーフア王家との対話を求めたのである。彼らが対話の相手として指名したのがサルマン皇太子だった。皇太子自身も彼らとの対話に意欲を示したのである。

それに待ったをかけたのが大叔父で首相のハリーフアであった。ハリーフアは1971年の独立以来実に40年以上も首相を続けている。彼はバハレーン独立当時のイーサ首長の実弟であり、1999年にイーサ首長が亡くなり息子のハマドが新首長(後に国王)に即位した後も首相を続け、甥のハマドを補佐している政治の大ベテランである。彼は決して頑迷な保守主義者ではなく、どちらかと言えばマキャベリストと言うべき人物である。

彼が首相を務める過去40年の間、国の内外で幾多の事件が発生した。外交面ではイラン革命の対抗措置として米国の第5艦隊基地を誘致したり、或いはハワール島領有を巡るカタールとの外交交渉などを取り仕切る一方、内政面ではシーア派による度重なる反政府暴動を鎮圧するなど数々の修羅場をくぐり抜けた超ベテランの政治家である。

ハリーフア首相はサルマン皇太子とシーア派若者たちとの対話に大きな危惧を抱いた。皇太子と若者たちは共に政治の怖さを知らず理想論に燃えているが本来は水と油の関係である。ハリーフアは彼らに国家の将来を論じさせるとのっぴきならない状態になると判断したのであろう。彼の判断は彼一人のものではなかった。隣国サウジアラビアの為政者たちも同様の認識を持ったことは間違いない。

皇太子は対話路線からはずされ出番を失った。と同時に彼に期待したシーア派住民は彼に失望したのである。

2. サルマン皇太子の横顔

(家系図<http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/3-3BahrainKhalifa.pdf> 参照)

バハレーンのサルマン皇太子はハリーフア家の当主ハマド現国王の長男として1969年10月に生まれ現在42歳である。バハレーンはGCCの中で最も古い歴史を持っており、古代バビロニア、アッシリア時代にはディルムーンと呼ばれる貿易中継地であり、また中世には真珠の産地として栄え

た。この地は長らくイランが支配していたためイスラム教シーア派の国民が人口の70%程度を占め



ている。因みにバハレーンを統治するハリーファ家は18世紀にアラビア半島から移住したスンニ派である。バハレーンにおけるシーア派(多数派被支配階級)とスンニ派(少数派支配階級)の対立は同国の根源に遡る問題なのである。

サルマンが生まれた2年後の1971年にバハレーンは英国保護領から独立し、その後1999年に彼の祖父イーサが亡くなり父親のハマドが第10代首長に即位、その時サルマンは皇太子になっている。ハリー

ファ家では第7代の長男が皇太子に就いて以来、首長没後皇太子が首長に即位し、首長が長男を皇太子に指名することが慣例となっている。つまり首長位は終身制で直系の長男が相続するシステムが平穩裏に続いているのである。世界の君主制度は一般的に終身制で生前譲位は稀である。また継承者も現君主の長男(直系男子、日本など)或いは男女を問わず第一子(直系長子、英国など)とする違いはあるものの最初に生まれた子供とすることが普通である。バハレーンもそのような普通の継承制度がとられておりサルマン皇太子が次期君主になることは既定路線である。

実は GCC6カ国の中でバハレーンのように君主が寿命を全うし、直系男子の皇太子に平穩に継承されている例はむしろ珍しいほうである。例えばサウジアラビアでは初代国王の死後第二代サウド国王から第6代のアブダラー現国王までは初代の息子達が継承している。クウェイトでは首長が亡くなった都度新皇太子が指名されており、継承ルールが不明確である。UAE のアブダビもサウジアラビア同様皇太子は現首長の異母兄弟である。またカタールは現ハマド首長が宮廷クーデタにより父親の前首長を追放して首長に即位している。これら各国に比べてバハレーンの王位継承制度は極めて安定していると言える。

このような安定した君主制のもとでサルマン皇太子はワシントンのアメリカン大学に留学して政治学を学び、さらに英国のケンブリッジ大学で歴史哲学を修めた。帰国後は国防省等で帝王学を学んだ後、1999年に皇太子となり、国民行動憲章実施委員長、経済開発委員長など政治・経済の要職をつとめ2008年には帝王学の仕上げとして国軍副司令官(司令官は父親のハマド国王)に任命されている。

因みにハリーファ家の当主はこれまで UAE、クウェイト、カタールなど他の GCC 諸国と同様「首長」を名乗っていたが、議会制度の導入(2000年)や憲法に相当する国民行動憲章の制定を経て2002年には政治体制を立憲王政国家に変更、以後ハマドは国王を名乗っている。従ってハマド現国王が亡くなればサルマン皇太子はハリーファ家第11代当主で第二代バハレーン国王となる。

サルマン皇太子は欧米留学で得た民主主義の知識と帰国後に国民生活に直結した要職を重ねることで国民との距離を縮め国民の信頼を得た。皇太子自身、自分が国民に信頼されていると考え

たであろうし、反政府のシーア派国民も皇太子を進歩的と信じ彼に期待したのである。首都マナマの中心地「真珠広場」がデモで騒然とした昨年2月から3月にかけて皇太子がTVを通じて対話を呼びかけた時¹、誰しもが彼を事態収束の救世主と見なしたのである。

しかしそれが幻想にすぎなかったことが間もなく判明した。サルマン皇太子の行動に待ったをかけたのが大叔父のハリーフア首相であり、その背後にはバハレーンの混乱をカづくで収めようとするサウジアラビアの影があった。

3. 老獯な首相と隣国サウジアラビアの危惧

バハレーンは少数派のスニ派ハリーフア王家が多数派のシーア派を支配している。このため今回の「アラブの春」以前にも事あるごとにシーア派が蜂起し騒乱事件を起こしている。しかし多数派のシーア派は必ずしも王制打倒を叫んでいる訳ではなく、自分たちの権利が正当に評価され行使できる環境を望んでいるのである。その背景には王制を廃し共和制国家になれば宗教国家イランの干渉と領土的野心の標的になり、その一方ではサウジアラビアなど豊かな湾岸のスニ派王制国家からの財政的支援が期待できなくなるからである。さらには米国の第5艦隊基地も撤退するであろう。それはバハレーンが丸裸になることを意味している。

国民対話を不用意に進めれば取り返しのつかないことになるという危惧が双方にあった。ある一つのテーマで支配者側が何らかの譲歩をし、それに対して被支配者側の穏健多数派が妥協したとしても少数の過激派が更なる要求を持ち出し、支配者側は次々と譲歩を強いられる。こうなると王族内部にも不満が鬱積し国王や首相に反旗を翻すようになる。また穏健多数派も少数過激派を抑えられなくなる。支配者側(スニ派王家)と被支配者側(シーア派国民)相互に亀裂が生じ社会は混乱に陥り、過激派がますます勢力を伸ばすというシナリオが現実味を帯びてくる。

老獯な政治家ハリーフア首相は危険な匂いを察知してデモの鎮圧に乗り出し、隣国サウジアラビアに応援を頼んだ。サウジアラビアの保守強硬派スルタン皇太子とナイフ内相兄弟(いずれもその後相次いで病没)は待ってましたとばかり治安部隊を送り込んだ。サウジアラビアにとってバハレーンはシーア派に対する防波堤なのである。

ハリーフア体制を支えるもう一つの国があった。バハレーンの第5艦隊基地から対岸のイランを睨む米国である。それは「バハレーンのイスラム(民主化)運動とそれに対する政府の弾圧政策の双方に口を出さない」という不作為である。米国はエジプト、リビアなど各国の「アラブの春」では為政者を批判し一般国民を支持した。しかしバハレーンについてはどちらの立場も明確には支持しなかった。これは結果的には為政者側に肩入れしたのと同じことなのである。

バハレーン王家のキーワードは三つある。第一は王制を死守することであり、第二はGCCのスニ派君主が互いに結束すること、そして第三のキーワードはイランに対抗するための親米外交、である。

ハリーファ首相はサルマン皇太子を国民対話から遠ざけた。対話は今も続いているものの具体的な成果は何一つ出ていない。対話を続けているというポーズこそが大切なのである。その一方、進展しない対話集会に苛立つ若者たちによる街頭デモはますます先鋭化している。デモ隊のプラカードには「Down, Down Hamad ! (ハマド国王を倒せ)」の標語が踊り、彼らは王制打倒とイスラム共和制樹立を叫び始めた。

先にも書いたとおり穏健なシーア派市民はイラン型のイスラム共和制を望んでいない。しかし最早彼らは過激な若者たちを制止できずただ黙って見ているだけである。現在の政情は一見静かであるが内部のマグマは少しずつ大きくなっているようである。その原因を作ったのがハマド国王を頂点とするハリーファ家なのか、それともイスラム革命を目指すシーア派の若者たちなのか？それは「Chicken & Egg (ニワトリが先か卵が先か)」の問題と言えよう。

国民対話から外された皇太子は国民の前に顔を現さなくなった。皇太子は「対話か対決か？」と言う究極の選択を迫られ、今はハムレットの心境であろう。最近の彼は国内から目をそむけ専ら外交に精を出しておりインド、英国などを歴訪している。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

(続く)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ Gulf Daily News; 'Let's talk'(2011.2.19), 'Dialogue only slution says Crown Prince'(2011.3.8)他